
星空の記憶

柳瀬亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の記憶

【Nコード】

N9734Y

【作者名】

柳瀬亮

【あらすじ】

レストラン『クレモンティーヌ』でパティシエとして働く御影恵みかげめぐみは、ある日レストランの店長に呼び出され、突然解雇されてしまった。納得ができない恵は、再度抗議をしようと店長室の扉を叩こうとするが…。衝撃の事実が発覚してしまう…。

ブローグ

「ふう、やっと終わった……」

都内の有名ホテルに隣接するレストラン『クレモンティーヌ』の厨房で、一人の女性が安堵の声を上げた。

「あ、疲れたあ……。今日は団体客多くてずっと立ちっぱなしだったもんな」

彼女の名前は御影恵^{みかげめぐみ}、高等学校の調理科を卒業後フランスへと留学し、パリ近郊の小さなお城を改装した日本人向けのパティシエ学校に通い経験を積み、帰国後このレストランで女性パティシエとして働き始めた。

明日の日替わりデザートとして提供する、ラズベリーをたっぷり使ったワインゼリーの仕込みをようやく終えて、棒のようになった足を幾度となく片手で揉み解しながら、用の済んだ調理器具を洗い始めた。

「ああ、足がパンパンだわ。帰りにマッサージ行こうかな？……いやいや、お金は節約しないと。いつ何があるか分からないだし……」

パティシエの世界はそう甘くない。ほとんどが男性従業員という男社会の上、恵の月給はわずか14万円。ボーナスも寸志程度で、社会保障もない。朝から買い出しと下準備が始まり、閉店後も片付けと翌日の仕込みで毎日17時間労働。休日も週に1日しかなく、25歳の女性には辛くて厳しい、試練の日々を送っていた。

「御影！」

恵が洗い物と足のマッサージを終えた所で、フロアマネージャーが厨房に顔を出した。

「マネージャー、お疲れ様です。…どうしたんですか？」

「店長が君を呼んでるよ」

「…店長が？…私を？」

恵が店長に呼び出しを受けたのは初めてのことだった。

「今すぐ店長室に来てくれって」

「…いったい何の用かしら？」

「さあ、それは店長に聞いてみないと…」

レストラン『クレモンティーヌ』の店長は、元々雇われシェフだったが、輝かしい技術力を買われて店長にまで登りつめた実力者。現在は経営に専念しているため、厨房に立つことはない。そのため、従業員が店長と顔を合わせる機会は皆無に等く、恵には呼び出しを受ける心当たりも、店長との接点も一切なかった。

「分かりました…。じゃあこのワインゼリー、冷蔵庫に入れておいてください」

「はいよ」

甘酸っぱい大人な味に仕上がったワインゼリーをフロアマネージュ
ヤーに託し、恵は駆け足で店長室へと向かった…。この先訪れる波
乱に満ちた生活の幕開けとも知らずに…。

第一話『さらばクレモンティヌ』

コン、コン。

店長室の扉を叩く音が、廊下に小さく響き渡った。「どうぞ」の声を聞き、恵は扉を開けた。

「失礼します」

中へ入ると、店長が革の椅子に座り、手に持った書類をパラパラと捲っている。

店長室は、まるでハウスキーパーが片付けたかのように整理されていて、左手には本棚、右手には応接間へと続く扉が見える。これから何を言われるかも分からない初めてのシチュエーションに、恵は不安を募らせていた。

「ああ、御影くん。待ってたよ」

書類を一旦机の上に置き、店長が立ち上がった。ツカツカと革靴の音を立てながら、扉近くにいた恵の方に歩み寄ってきた。

「あの…、私に何かご用でしょうか？」

「……うーん、それなんだがねえ…」

店長の顔が突然曇りだし、髪の薄い頭を掻きながら、視線を恵から逸らしてしまった。

「…少し言い辛いんだがねえ。君…、ここで働いて何年になる？」

「…もうすぐ二年になります」

「そうなんだよねえ、二年も経つんだよねえ。月日が経つのは早い…」

奥歯に物が挟まったようなものの言い方を始めた店長に、恵の不安は頂点に達した。一体なぜ自分呼び出したのか早く知りたくて、話題をふりだしへと戻した。

「あの、ご用件は？」

「来月で辞めて貰えないか？」

「…えっ？」

ふりだしへ戻した瞬間、恵はストレートパンチを喰らってしまった。頭の中が真っ白になり、現実を受け止められない恵に、店長は追い討ちをかけるように解雇の理由を語り始めた。

「お客さんの評判が、最近良くないんだよねえ。君い。…デザートが不味くなったって」

「不味くなった？」

「ああ。…腕が落ちたんじゃないか？」

店長は人をバカにしているような位置まで眉毛を上げ、重度の歯槽膿漏であろう汚い歯茎を見せながら、解雇の理由を恵の力不足だと説明した。あまりに理不尽な説明と、店長独特の口癖に、恵の心

の中で別の感情が湧き上がっていた。

「…私はここで働かせて頂いてから、一度も材料を変えたり、作り方を変えたりしていませんが？不味くなった、腕が落ちたという理由は納得できません」

「とーにかくねえ！君はクビなんだよクビ。来月で退職してもらおうよ！」

恵が若干強気に口答えした瞬間、店長が遮るように恵を捲くし立てた。

「…そんな、急に言われても」

もう何を言っても無駄なのだと、恵が絶望の崖っぷちに立たされ戦意を喪失した所で、店長がトドメの一発。

「家は伝統あるホテルに隣接している由緒あるレストランなんだ。…落ち目のパティシエはいらない」

「落ち目…ですって？」

崖っぷちから海へと蹴り飛ばされた恵はショックを受け、放心状態となり、返す言葉が何も出てこなかった。

「話は以上だ。…じゃあ来月までよろしく頼むよ」

「……………はい」

恵は土左衛門になって海に浮かんでいた。店長室から出て、廊下

をフラフラと歩き始めた恵の頭の中は、海霧のようにモヤモヤとしている。

「……………」

霧が晴れると、店長の憎らしい顔と口癖、そして何より「落ち目のパティシエ」という言葉がリピート再生で流れる。

100回以上リピートされた所で、恵の頭の中は店長への憎しみで満ち溢れた。

「私がクビってどういう事？嘘でしょう？二年も働いて来たのよ。一生懸命頑張って働いたのに…。パリに留学までして、やっとパティシエになったのに…。こんな形で職を失うの？」

憎しみの波が、土左衛門になった恵を陸まで押し上げ、崖を這い上がらせていた。

「……………やっぱり納得できない」

更衣室へと向いていた足を、店長室に方向転換して歩き始めた。童顔で癒し系の容姿からは想像できないほど、昔から気の強かった恵は、不服と感じた判決には異議を申し立てるタイプだ。

恵が再び店長室の前へと戻り、扉を叩こうとした瞬間、店長室の中から聞き覚えのない女性の声が聞こえてきた。

「……………ん？」

店長室の扉が少し開いていた。さっきは放心状態で店長室を出てしまったので、キッチンと扉を閉めていなかったのだ。

扉の隙間から中の様子を見てみようと、恵はそつと覗きを始めた。

「ねえんゝあのダサイ女、本当に辞めてくれるかなあゝ？」

アニマル柄のカットドレスを着た巻き毛のキャバ嬢っぽい女が、店長の腕を掴みながら、猫なで声で甘えている。あんな見知らぬ女は、さつき店長室には居なかったはず。恐らく応接間に潜んでいたのだろう。

「だーいじょうぶう！解雇通知したんだ、嫌でも辞めさせるさ」

店長はキャバ嬢の髪を優しくなでなでしながら、元から気持ちの悪い笑顔を更に気持ち悪くさせて、恵の大嫌いな口癖を垂れ流していた。

「あきにゃんねゝ、有名にゃホテルレストランで、あきにゃんのオリジナルお菓子をいっぱい作るのが夢だったのおゝ」

「そうかゝ、アッハハ。あきにゃんは本当に女の子みたいな夢を持つていたんだなゝ」

「うん！あきにゃんオンニヤの子だもん。あゝん、来月まで待てないよおゝ」

「一ヶ月なんてあつと言う間だよ。それまで一緒に、あきにゃんが作る日替わりデザートを考えような」

「ああゝん、嬉しいゝい！あきにゃんと一緒に新しいお菓子考えてええゝ」

恵は知った、何故解雇されたのか。

「僕たちみたいに、あまゝくてトロけちゃいそうなお菓子にしようね」

「わぁおう！It's a Sweet World！」

プルプル怒りに震える両手を抑えることはできなかった。恵はバーン！と音を立てて扉をぶち開けた。

「…おい！」

恵が店長室に入ると、二人の表情は凍りついた。キャバ嬢は両手で口を押さえながら目を真ん丸くしていて、店長は青い顔で若干白目が多くなっている。

「……そういうこと…」

恵がホラー映画の心霊にも負けないほどの、恐ろしいゆっくりした口調で二人に歩み寄る。

「いや、あの……、これは……」

「あきにゃんコワイ！」

動揺している店長を思い切り睨みつけながら、まっすぐ向かっていく恵は、ついにぶち切れてしまった。

「…客の評判が悪くなったですって？…デザートが不味くなったですって？デタラメ言いやがってこのウストラヌキ！」

恵が暴言を吐いた瞬間、店長は顔を真っ赤にして恵を指差した。

「君！誰に向かってそんな口を叩いているんだ！ん？」

「うっさいわ！ウスラダヌキに言っただよ！私を本気で怒らせたかどうか…」

恵の右手は既に準備万端だった。この怒りは殴らないと収まらない、自分の性格は自分が一番良く分かっていた。

「このやろおおおー！！」

「きゃああああああああっっっ！」

自分のことを「あきにゃん」というキャバ嬢の悲鳴と共に、顔面パンチを喰らった店長は、目を真っ白にして倒れ込んだ。

しばらくすると、店長の鼻の穴から血がポタポタと垂れ始め、革靴の擦り跡もない美しい床を汚していた。

第二話『初めての出会い』

「で？即日クビ？」

「そう、クビ。…嫌なら傷害罪で訴えるって言われたわ」

恵が店長に強烈な顔面パンチを喰らわせた直後、店長室にはレストラン『クレモンティヌ』の関係者達が物音を聞きつけて一斉に集まり、恵は即強制追放、懲戒解雇された。

無職になった恵は、トボトボ歩きで自宅マンションを目指しながら、携帯で友達に今日の出来事を長電話していた。

「恵も馬鹿ねえ、ボコボコにしなければ不当解雇で訴えられたのに」

「だって頭に血がのぼったんだもん。殴らないでいられる訳ないじゃない、愛人を雇うために私をクビにしたなんて事実を知ったら…」

「分かるわあ、私ならぶっ殺してるわ。ギャッハハハハ」

「笑い事じゃないわよ。私…今日から無職だわ」

友達の名前は五十嵐和沙^{いがらしかずさ}、夜の世界で働いている中学からの同級生だ。彼女は恵が素のままで付き合える唯一の友達で、悩みや愚痴などをずつと語り合ってきた。今日起きた恥ずかしい事件も、和沙になら全て話せる…そんな関係だ。

「ハローワークには行っただの？」

「そんなのまだ行っていないわよ。今日解雇されたのよ？」

「ふうん、じゃあ明日私と一緒に行きましょう？買い物にも付き合って欲しいし…」

「買い物？そんな気分になれないわよ」

「なれなくても来てちょうだい！色々話も聞いてあげるから。明日17時にいつもの駅前ね」

和沙が強引に約束を取り付けた所で、携帯はブツンと切れてしまった。

「ちよっ！…たく、いつも一方的に決めちゃうんだから…」

携帯の向こうでは、和沙が大慌てで出勤の準備をしていた。恵のことは心配だったが、長電話している時間はなかったのだ。

「もう、この忙しい時に恵ったら…。でも…クビになっちゃったのね。あれ？昨日買ったファンデがない…。パティシエになれたことあんなに喜んでたのに…。ああ、あったあった。明日は恵を元気づけてやるっ…。やだっ、ナチュラルオークルにしたの失敗だったわ、色が黒い！こんな暗い色のファンデーションよく売れるわ…男用じゃないの？…まあ、私も元は男だけど…ギャツハハハハ」

そう、恵の友達である和沙は、ニューハーフパブで働く元男性なのだ。恵が男友達として仲良くしていた同級生の和男は、恵が留学から帰国した時、和沙になっていた。つまり、和沙も心と体の留学をしていたのだ。

和沙が普段より暗めの色に仕上がった化粧を終え、ウエストカッ
トロングドレスの衣装に着替えて家を出る頃、恵はシャッターの降
りた公共職業安定所の前に立っていた。

「ここがハローワークか…。そりや閉まってるわよね、営業時間
は何時までなの？…ゲツ、19時まで？ハローワークって本当に不
親切ね」

営業時間を確認した後、入り口近くにささっていた就職活動用の
パンフレットを一枚手に取り、自分のバッグに入れた。「はあゝあ
とため息をつきながら、再び歩き始めようとした恵の眼中に、ある
看板が飛び込んできた。

「…癒しのバー、オリオン？」

道路に面したハローワークの隣にそびえ立つ商業ビルの1階に、
美しい星空が映し出されたLEDビジョンの看板が出ていたのだ。

「…ずいぶんオシャレな看板だと思ったけど、飲み屋か。…ウチの
近所にこんなお店があったの気付かなかったな。…でも一人で入る
のは気が引けるし、飲んだくれたオヤジとかに絡まれたら嫌だし、
だいたい無職になった日に飲んだくれるなんて絶対イヤだわ」

恵がオリオンの前を立ち去ろうとした時、急に扉が開き、OLらし
き二人組みが中から出てきた。慌てて商業ビルのエレベーターホ
ールに行き、エレベーターを待っている人のフリをしながら聞き耳
を立てた。

「オシャレなお店だったね、疲れも取れたしすっごく癒されちゃ
った」

「バーテンも格好良かったね！これからハマっちゃいそう！」

テンションの高いOLの会話をバツチリ聞き、二人が駅の方へ去って行ったのを確認した所で、恵は決意する。…私も癒されたい、と…。

チリンチリン。

バー店内に入ると、心地の良い音楽が流れ、星をイメージした癒しの装飾達に出迎えられた。カウンターがメインの落ち着いたバーの雰囲気、傷ついた私の心にぴったり！と恵は期待を膨らませていた。

「…こんばんは」

「いらっしやいませ、どうぞお座りください」

恵以外の客はいなかったが、カウンターテーブルの向こうに、まるでモデルのような容姿をしたロングヘアのバーテンダーがにっこりと微笑んでいた。

「…わあ、オシャレなお店ですね」

「ありがとうございます。…こちらがメニューになります」

「あつ、どうもありがとう」

温かいおしぼりとメニューを渡され、顔面パンチを喰らわせた右手を含む両手を拭きながら、じっくりカクテルメニューを眺めた。

メニューは豊富で、どれにしようか正直迷ってしまったが、お店の雰囲気ピッタリなカクテルを注文することにした。

「…星空のカクテルで」

「かしこまりました」

シャカシャカ。

バーテンダーがカクテルを作っている。深いため息をつきながらカウンターに肘をつき、シャカシャカ振られるシェイカーをじっと見つめながら、今日起きたことを冷静に考えていた。二年勤めたレストランをクビになり、社会から追放された。学歴も若さもない自分は再就職できるのだろうか…、またパティシエとして雇ってもらえるのだろうか…、明日からの生活はどうなるのだろうか…、不安でいっぱいになった頃、カクテルは出来上がった。

「お待たせしました」

恵の不安を表しているかのように、銀色のシェイカーからグラスに移されたカクテルの色は、深いブルーだった。

「わあ、青い！」

「ブルー・キュラソーで星空をイメージしています」

「へえ、そうなんですか…」

恵はセンチメンタルな気分になっていた。ブルー・キュラソーを使ったカクテルを、昔レストラン『クレモンティーヌ』の日替

わりデザートで作ったことを、ふと思い出してしまったからだ。

もう自分は、あのレストランで働くことはないのだと…実感が湧いて来た恵は、すべてを忘れるかのようにゴクゴクと星空のカクテルを飲み始めた。

「あゝ、サッパリとしたレモン味ですね。見た目も綺麗だし、すごく美味しいです」

「…ありがとうございます。…美しいお客さんにピッタリですよ。今日はお一人なんですか？」

「やだ…美しいだなんて。…女性が一人でバーに来るなんて、おかしいですか？」

「そんなことはありません、お一人でも大歓迎です。もし良ければ、お話し相手になりますよ」

「私、そんな寂しそうに見えます？」

「見えますよ…。こんなに美しいのに、物思いにふけていて、まるで人魚姫のようだ…」

バーテンダーは営業トークで言っている訳ではなく、本気で恵を口説いていた。恵は長身で脚が長く、スタイルは群を抜いている。長い髪と筋の通った鼻、品のある口元と男性を虜にする澄んだ瞳は、恵が持っている唯一の武器である。そう、唯一容姿だけは良いのである。逆に言えば、容姿以外の部分はパティシエの才能以外、何も持っていない。今夜も一人の男が、容姿から恵を口説いてすぐに後悔した。

「ふざけんなっつーのよ！」

「……」

時が経ち、恵がカクテルを何杯飲んだか分からなくなった頃、遂に恵の本性が現れてしまった。そう、酒癖が悪いのだ。

「一生懸命働いたのに、私の二年を返せって言うのよ！あのウスラダヌキ……ひつく。星空のカクテルおかわり……！濃くしてねロングの兄ちゃん！」

普段から悪い口は、酒のせいで更に悪化していた。

「……お客さん、もう止めた方が……」

「何？辞めた方がいいですって？私に解雇通知してるの？私はクビ？」

「はあ？何をおっしゃってるんですか？」

呆れ果ててドン引きしているバーテンダーに絡む恵は、怒りと共に椅子から立ち上がった。

「あきにやんだと？笑わせるなあ……！お前らを絶対ぶっ飛ばしてやるからなあ……！」

立ち上がった瞬間、恵はバランスを崩し、意識が遠ざかってしまった。

「ああっ、急に立ったらまめいが……、ああ……、ああ………」

「お客さん！」

ボタン！と恵の上半身がテーブルに大の字で倒れこみ、足はカウンターに宙ぶらりん状態で寝てしまった。

「うつ……、うつん……。やだ……、いつの間にか寝ちゃったんだわ……」

どれだけの時間が経過したのだろうか。恵が目覚めると、装飾のLEDは全て消えていて、店全体の照明も薄暗くなっていた。バーテンダーは何処へ行ったのだろう、恵が周りを見渡した。

「……………やだ」

後ろのボックスソファに、バーテンダーではない一人の男が長い足を持て余すように座っていた。ボックステーブルの上には山積み
の明細、売り上げを計算しているようだ。

「ん？」

男がこちらに気付いた。三十歳くらいだろうか、長身と肩幅の広い体格、座っているだけで威圧感があるのに、するどい目でこちらを睨みつけて来たので、思わず足がすくんでしまった。

「あつ……、やだ……私……。……すみませんでした、迷惑かけちゃったみたいで……」

「…ああ。…やっと起きたか」

男は視線を明細に戻し、また売り上げを計算し始めた。
薄暗い照明に目が慣れて来て、男の顔をよく見ると、荒削りだが端正な顔であることが分かる。俳優のように整った髪型と、高い鼻と奥二重の目。黒いジャケットスーツを来て、眠りから目覚めたばかりの恵には王子様のように見えてしまった。

「…ごめんなさい、ちょっと酔っ払っちゃって…エヘヘ」

「ちょっと？」

「…はい、たくさんちよこつと。エヘヘ…」

この「エヘヘ」は、恵がぶりっ子する時によく使う台詞である。
ちなみに「たくさんちよこつと」なんて日本語は存在しない。

「……………」

ぶりっ子作戦が効かなかったのか、男は沈黙後、予想外の質問をして来た。

「…お前、いくつ？」

「え？」

恵の顔は引きつった。歳を聞かれたからではなく、初対面の相手に「お前」と言う人称代名詞が使われたことにイラッとしたのだ。

「……………25です」

「……………」

若干声のトーンが低くなりながらも、質問に答えてやった。しかし、男は呆れる表情をして沈黙してしまった。

「……………何か？」

恵が「言いたいことあるならはつきり言えよ」な態度を見せると、男はこう切り出した。

「…25で一人、朝まで飲んで大騒ぎした挙句、所構わず寝るなんて……。……………オヤジだな」

耳を疑った。初対面の相手にお前呼ばわりされた挙句、オヤジになってしまったからだ。不服と感じた発言には異議を申し立てるタイプの恵は、黙ってはいられなかった。

「……………なっ、なんですって？」

「…就職活動中なんだろう、ほら」

「えっ？…あつ！就活のパンフレット…」

「…床に落ちてた。…就活中なら、こんな所で酔い潰れてないで、真面目に職探しするんだな」

「ちよっ！私は昨日までちゃんと…」

言い争う気マンマンの恵だったが、寝ている間にバックからハラ

りと落ちてしまったらしい弱点を突きつけられ、ぐうの音も出なくなってしまった。

「もう店はとくに閉店してるんだ。お目覚めのようだし、…そろそろ帰ってくれないか？」

恵の完敗である。悪いのはすべて恵だ、ここは素直に謝ろう、どんなにム力つく相手でも。

「……………分かりました。大変ご迷惑おかけしてすみませんでした。では失礼します」

ムツとした表情の恵は、ツタツタと早歩きで入り口に向かった。

「…おい、ちょっと待て」

「なによ？」

「勘定」

「…！」

男に呼びとめられ、お金を払っていなかったことに気付く…。何から何まで、この男には敵わないらしい。

「チャージ、ショット9杯で6000円」

「……………6000円」

そんなに飲んでいたのか…と落胆しながら、無職の身には痛い大

出費をするはめになり、恥ずかしいんだか、情けないんだか、悲しいんだか感情がよく分からなくなっていた。

「財布……、あれ？えっと……」

「……そんなに星空のカクテル、美味かったか？」

「……」

恵がバックの中から手探りで財布を出そうとしている間、この男は人の神経を逆なでするような台詞を吐いて来る。

「……はい！6000円……」

「……確かに」

やっこの思いで財布を取り出し、お金を手渡しした所で、男はツツタと入り口の方へ歩いていき、扉をガチャっ！っと開けてこう言い放った。

「さあ帰れ」

「……」

王子様だと勘違いして、一瞬でもぶりっ子を演じた自分が馬鹿馬鹿しく思えた。容姿だけで人を見るのはやめよう……、恵がそう誓った所で、捨て台詞を吐いてやった。

「……ふんっ！」

今の恵には、これが精一杯。

外へ出ると、空はすっかり明るくなっていて、街は静まり返っていた。ふと時間を確認すると、時計の針は朝の5時を指していた。結局6時間近くオリオンで眠っていたようだ。

「あーイテテ、変な寝方したから背中が痛い。…ったくなによアイツ、どんだけ上から目線なの！偉そうに…。癒しのバー？癒されるどころか頭に血がのぼったわ！…はあ、頭もガンガンする。…公私混同店長に上から目線男？もうウンザリだわ…。家に帰って二度寝しよう」

ボロボロになった心と身体にムチ打って、恵はやっと自分のマンションに帰った。

速攻ベッドに倒れこみ、長い一日が終わったと、深いため息をつきながら目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734y/>

星空の記憶

2011年12月1日12時54分発行